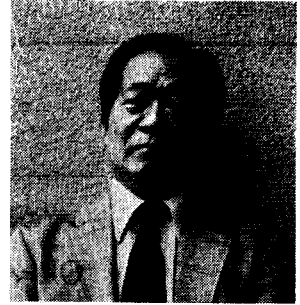


ORマンよ！

“OR馬鹿”となるなかれ

日本システム株式会社 原野 秀永



戦時中一部の軍人の言動には目にあまるものがあった。彼らは世界の動きに疎く、国民や社会のありさまを考えることもなく、自己の主張はすべて正しいものとして行動し、これに反する人々に対して非国民のラベルを張って、抹殺をはかったことは周知の事実であった。世人は彼らを“軍人馬鹿”という言葉で陰ながら謗ったものであった。このような“軍人馬鹿”が専横をきわめ、その結果国民を敗戦の淵に投げ込んだ。（軍人の中にはこのような“軍人馬鹿”に対して反対して平穩の裏に終戦に導いた人々の在ったことも忘れてはならない）。このような“軍人馬鹿”を生じた原因としては職業軍人が偏った教育を受け、一般社会とは隔絶した中で生活し、社会のありさまや進歩に背を向けていたことに起因していると思われる。（一言にしていえば社会的常識の欠如が大きな原因である）

現在では国を破るほどの大きな集団となった馬鹿はいないと思われるが、大なり小なり“何々馬鹿”といわれる集団が生きている。学問という高遠ではあるが狭い世界に住んで社会の常識に欠ける“学者馬鹿”，芸能界に安住して良識に欠ける“役者（芸能人）馬鹿”，（新聞を賑わす麻薬の飲用などはその例の1つであろう）等数え上げればきりがなくない。しかし現代の三大馬鹿として“国鉄馬鹿”，“役人馬鹿”，“政治屋馬鹿”があげられる。これらの馬鹿の特色として自分らの狭い範囲の中でのことを考え、社会人の感覚とは離反した行動を平気でとっている。このような良識の欠如の原因は狭い仲間の中で思考し、行動しているうちにいわゆる社会の良識が次第に薄れてくるところにある。

一方オペレーションズ・リサーチは決定の科学といわれているが、決定がロジカルなもののみによって行なわれるものでなく、決定者の心情が大きく左右する。決定に際してロジカルなまた計量的なもの（方法論としてORの守備分野であるが）と情動的なものとの間に一線を画して、これより先は決定者の範囲でありこれ以降がオペレーションズ・リサーチの守備分野であるとするのはほとんど不可能に近い。（数学的モデルの解析はロジカルな、また計量的な分野であるが、モデル構築までの過程には非計量的なものを十分に考慮する必要がある）またオペレーションズ・リサーチの対象とする分野は仁義釈教恋無情といった人間臭い世界であって、決して寒厳枯木の血の通わない世界ではない。

オペレーションズ・リサーチがとなえられ始めて以来すでに30年以上経過した。当初は機械的な要素の強い分野の問題がかなり多くとりあげられた。たとえば生産計画に対するLPの適用や単純な行列の問題に待ち行列の適用といった分野の問題については幾多の例がある。しかし時がたつにつれて、標準的な手法を機械的に適用するような問題は少なくなり、決定の構造や社会の状況をくみいれてモデルを作る必要がある問題が多くなってきている。直接に決定の構造や人間のかかわりをモデルにくみこんだものは未だ研究の域を出ないが、少なくとも間接的にでもこれらの因子を考慮に入れてモデルを作らなければならない。このような状況に対して決定者の意志も考えず機械的

に手法を適用するOR屋のいかに多いか。このようなOR屋はさしずめ“OR馬鹿”といえることができる。(同じことが“SE馬鹿”“コンピュータ馬鹿”についてもいえる)

“OR馬鹿”の生まれる原因はいろいろあげられる。第1のものは大学におけるOR教育であろう。大学におけるオペレーションズ・リサーチの教科は手法とその解法が中心で、問題をどのように考えてモデル化するかについてはほとんど説かれていない。少なくとも手法の物理的な像とその限界についての懇切な説明はないようである。

第2にあげられるものとしては発表される実施例も手法中心であってどのような必然性の下で該当するモデルが作られたかに関しては説明がほとんど記述されていない。複雑な式を用いて、計算機を使って得られた結果が高級な結論であるかのような錯覚におちいっているものも少なくない。さらにオペレーションズ・リサーチの教科書も手法中心で(書物で考え方を記述することは容易でないことも事実であるが)計算方法とモデル化された実施例の記述より成り立っている。これでは“OR馬鹿”の生まれるのも当然であろう。(物の考え方よりすればORの教科書以外の本—たとえば小説、探偵小説や歴史等の本—のほうがはるかに有益であろう)

オペレーションズ・リサーチは新しい方法論を開発する学の部分と実践の場に応用する術の部分より成り立っている。学の進歩にともなって術が進み、術の要求に応じて学が進展するのが望ましい姿である。このような学の部分と術の部分の発展に寄与することが学会の望ましい姿ではなからうか?

しかし現実の学会の発表を見るに学の部分が主流を占めて、しかもその中には瑣末的なテーマをとりあげているものもなしとしない。瑣末的なものもオペレーションズ・リサーチに進歩に役に立つではあろうが、あまりにも瑣末的なものはス

イフトの“ガリバー旅行記”に登場する学者に類するものではなからうか?

学会としては学と術の相ともなった進歩をはかるために、文献賞、普及賞および実施賞が設立されたことはすでに会員各位も承知であろう。文献賞は学の進歩に、普及賞および実施賞はそれぞれオペレーションズ・リサーチの発展並びに実施して効果をあげたものに授与されるもので術の推進に役立つことを目的としている。しかし実施賞は従来の実績よりすると企業全体がオペレーションズ・リサーチを推進している場合が多く、すぐれた個々の実施例については未だない。術を推進するにはやはり埋れている個々のすぐれた実施例を発掘して表彰するにしくはない。このような考えで今回事例研究奨励賞が制定された。これが“OR馬鹿”を少しでも少なくし、文献賞と並んで学と術の進歩に寄与することができれば幸いであろう。

先に述べた“何々馬鹿”が発生する原因の1つとして、狭い仲間の中で生活し、広い社会の良識を喪失してしまうことがあげられる。オペレーションズ・リサーチでもこのような弊におちいることを防ぐためにチーム制で仕事を進めることの必要性はすでに先人が述べているが、これなどは“OR馬鹿”の発生を防ぐ有効な手段であろう。しかし企業は1つの閉された社会である。この中に安住する限り、ORマンが広い社会的な常識をもつことは決して容易ではない。ともすれば思考の硬直化をきたして“企業馬鹿”におちいる弊を生じがちになる。これに対して学者や種々の企業人より構成されるオペレーションズ学会が広い社会常識を与える場としては最適なものであろう。各種各様の人々が自由に意見を交換し、意志の疎通をはかる場として学会、特に春秋2回の発表会や各種の研究會が利用されるならば、“OR馬鹿”といったことは激減するものと思われる。“OR馬鹿”治療の場としての学会はきわめて重要なものが在り、大いに期待する次第である。